

うみとろくに

Suma
Aqualife Park
in KOBE

もっと知ってスマスイ

トピックス

ガラスの向こう側
すくすくペンギン成長記
～第3弾!お手伝い～

スマスイ生物図鑑 part33

研究の窓
大阪湾・播磨灘に来る
ウミガメたち

出張見聞録
クジラに会いたい!
～座間味村の魅力に触れた旅～

スマスイ職員名鑑

2018

6

June



世界の ウミガメフリーク 神戸に集う

特集
SPECIAL ISSUE

世界のウミガメフリ

研究教育課 石原孝

↓当園で行われた歓迎会



↑自ら司会もこなす松沢会長



↑講演の様子。口頭発表は2会場に分かれて行われた

海

水温も下がり、ウミガメが大阪湾からいなくなる2月、ここ神戸に世界中から“ウミガメフリーク”が集まり、熱いウミガメトークが朝から晩まで1週間近く繰り広げられました。「第38回国際ウミガメシンポジウム」が2月18日～23日、神戸国際会議場で開催されたのです。米国に本部を置く国際ウミガメ学会が主催するこのシンポジウムは、年に1度開催され、世界中から研究者、NGO、政府機関、学生、ボランティア、マニアなどが集まります。そして、ウミガメをキーワードに、さまざまな立場から学術的な研究発表や最新技術の紹介、各地の保護活動の紹介など、幅広く議論がなされます。須磨海浜水族園の研究参与でもある松沢慶将博士が国際ウミガメ学会の会長を務めていたことから、このたび日本での初開催となりました。当園も共催団体となり、スタッフ総出で企画運営を担ってきましたので、その様子を紙幅の許す範囲でお伝えしたいと思います。

まずはその規模。「ウミガメだけ」を対象としているにもかかわらず、55カ国から632人の参加がありました。学術発表は11のテーマに分かれ、139題の口頭発

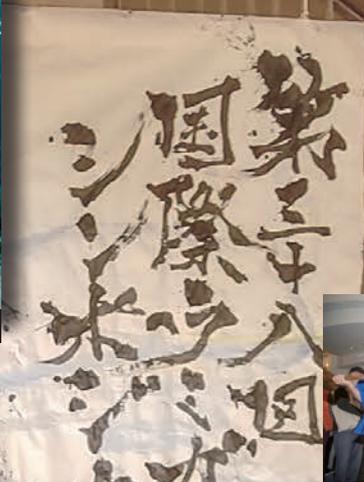
表と199題のポスター発表が4日間にわたって行われました。それぞれの発表を見ると、地域間のつながりを調べるための遺伝子解析、体中の炭素や窒素から過去・現在に食べていた餌の推定、記録計をウミガメに取り付けての行動や生態の研究などが世界各地で行われており、ドローンを活用した研究も年々増えています。また、最新技術や医療ケアなどに関する10のワークショップ、東アジアや地中海、アフリカといった7つの地域会合のほか、レッドリストを作成しているIUCN(世界自然保護連合)の種の保存委員会ウミガメ専門家部会もこのシンポジウムに合わせて開催されました。

今年のシンポジウムでは、メインテーマを「Beyond Protection of Sea Turtle～ウミガメ保護のその先に～」と設定し、同名の特別セッションも開催しました。ウミガメは各地の懸命な保護活動により、いくつかの種や地域個体群は劇的に個体数を回復しています。では、この先私たちは回復してきたウミガメや自然とどう関わっていくべきなのでしょう。それを生物学、社会学、民族学などのさまざまな側面から議論したのです。結論がすぐに出る

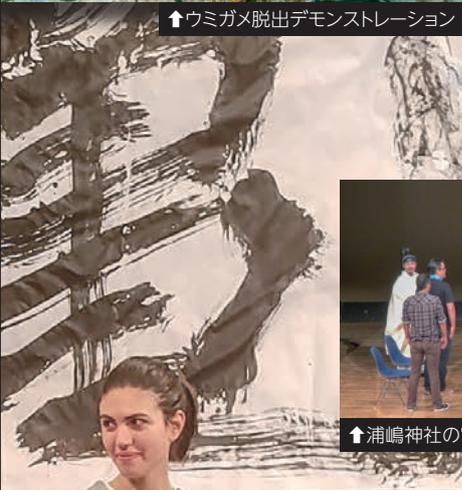
ーク神戸に集う



↑ウミガメ脱出デモンストレーション



↓和太鼓松村組による演奏



↑浦嶋神社の宮嶋宮司による安全祈願祭



↑餅つき体験

↓受賞スピーチをする亀崎博士



↑プログラムブックと記念品の風呂敷、ヒノキの升

テーマではありませんが、今回の議論をきっかけに、ウミガメの、そして野生動物の保全に対する議論が深まっていくことを期待しています。なお、シンポジウムの公用語は英語なので、日本の参加者のために口頭発表には同時通訳を依頼し、ポスター発表や会話の際には通訳ボランティアの皆さまに助けていただきました。

夜 は夜で多彩なイベントが行われました。例えば、当園で開催した歓迎会 (Welcome Social)。予想を超える参加者の数に、エントランスホールが埋め尽くされました。当園も開発に携わるウミガメ脱出装置のデモンストレーションを大水槽で行い、多くの参加者に注目いただけました。また、日本文化の一端にもぜひ触れてほしいとの思いから、翌日の夜には「ジャパンナイト」と題したイベントを企画。和太鼓演奏、着物の着付け体験、書道パフォーマンス、餅つき体験、神戸牛の試食、折り紙・風呂敷教室が用意され、どれも大にぎわいでした。会場を埋め尽くす参加者が心から楽しむ様子に胸が熱くなり、一人涙をこらえていたのはここだけの秘密です。さらに次の夜には国際ウミガメシンポジウム恒例のライブオークションが続

きます。毎年大盛り上がるイベントで、学生や開発途上国からの参加者の旅費支援のために行われます。さまざまな趣向が凝らされており、著名な研究者扮するオークションによる巧みな盛り上げもあって、気が付けば財布からお札を出しています。そして、最後の夜を締めくくるのが「晩餐会」。この時、学生発表賞やボランティアリズム賞など各種学会賞が発表されるのですが、当園の亀崎直樹学術研究統括(前園長)が特別功労賞 (ISTS Lifetime Achievement Award) を受賞しました。特別功労賞は、専門家として歩んだ人生を通じて、世界のウミガメの生物学と保全の分野に絶大なる影響を及ぼした個人をたたえるための賞です。国際ウミガメ学会による顕彰制度の中で最も権威のある賞であり、日本人による受賞は初めての名誉となりました。

ま だまだお伝えしたいことは山のようにありますが、メインテーマにもある「保護活動の先にあるもの、なぜ保全が重要なのか」をウミガメに限らず意識しながら、当園は今後も前に進み続けていくことを約束して、結びとさせていただきます。

1

TOPIC

新春ラッコイベント 「かるたでおせち」を開催

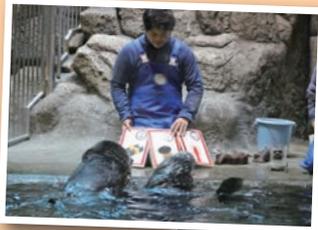
開催日=1月1日・2日

今回は新たな取り組みとして、お正月らしくかるた取りを実施しました。おせちの目玉食材であるイセエビ、トコブシ、コンブが描かれたかるたをラッコが選び、食べる順番を決めるといものです。これらの食材には、幸福や長寿祈願の意味が込められています。縁起の良いおせちを食べて、ラッコたちにとって良い年明けになりました。



トピックス

豪華なおせち→



↑かるたを選ぶ
明日花とラッキー



イセエビを頬張る
ラッキー→

2

TOPIC

バレンタイン・ホワイトデー企画展 「恋するバレンタイン!? スマスイの恋愛物語」を開催

展示期間=2月1日～3月14日

名前や見た目がバレンタインデーやホワイトデーを連想させる5種の生きものを、恋愛ストーリー仕立てで展示しました。ハートなどで飾られた水槽や生きものの紹介文に、お客さまからは「かわいい」や「初めて知った」などの声が上がリ、スマスイ流の恋愛物語を楽しんでいただきました。

↓企画展風景



↑チョコレート色の
体色が特徴の
チョコレートグラミー



↑ニシキゴイ(コイ=恋)。鰓蓋の模様までハートに見えてくるのは、企画担当者だけでしょうか...?

3

TOPIC

「地元の水産業を知ろう!今が旬!! 須磨海苔養殖大解説」を開催

展示期間=2月5日～4月8日

須磨の海では冬場、ノリ養殖のための網が一面に並びます。地元を代表する水産業のノリ養殖について、生活史、養殖法、製造、流通工程を紹介し、須磨の漁師から分けてもらった生きたノリを展示しました。また、期間中には1日限定で「須磨海苔」を使ったノリすき体験も実施し、ノリへの関心を深めていただきました。

↓会場写真



←ノリすき体験

4

TOPIC

企画展 「#かいじゅうを撮ろう!」を開催

展示期間=2月10日～4月8日

写真を通じてもっと動物に興味を持ってもらいたい!という思いから生まれたこの企画展。写真を撮ることやお薦めの撮影時間をパネルで紹介しました。特別イベントとして、飼育員しか入ることのできない動物飼育エリアから写真撮影ができるプレミアムツアーも春休み限定で開催しました。目の前の動物たちに、ツアー参加者も大興奮でした。



↑ツアーの様子。
ペンギンを
無我夢中で撮影!



フオスポットも
登場→

5

TOPIC

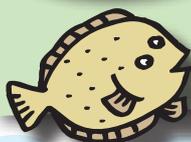
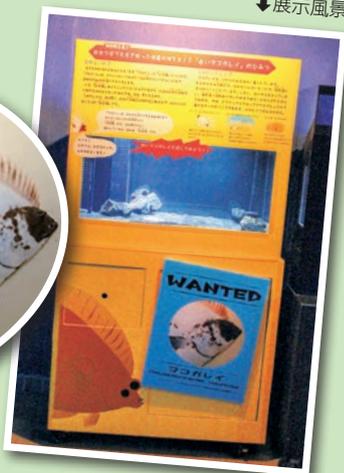
目立ちたくないけど、目立っちゃう「白いマコガレイ」を展示

展示期間=2月22日～3月22日

一般の方から、徳島県で漁獲された白いマコガレイを寄贈していただきました。よく漁獲される種類で通常は茶褐色をしていますが、白い姿は外敵に目立つため成体まで育つことはとても珍しい事例です。通常のカレイと一緒に展示し、体色が白くなった理由などを紹介することで、お客さまに関心を持って見ていただきました。

↓展示風景

↓白いマコガレイ



6

TOPIC

記録更新中！ ロングノーズガーが41歳になりました

当園が世界に誇る、ご長寿ロングノーズガーが3月1日で41歳になりました。1977年に世界で初めて飼育下で誕生した個体であり、ロングノーズガーという種の飼育最長世界記録と、国内の水族館で繁殖した全ての魚類の最高齢記録を更新中です。これからも変わらず、元気に暮らしていただくことを願っています。

↓41歳になったロングノーズガー



7

TOPIC

「NO.1 スマスタグラマー決定展！」を開催

開催期間=3月1日～4月8日

2017年3月から約1年間、開業60周年記念のキャンペーンとしてInstagramで写真コンテストを実施しました。全6テーマで応募総数約2,500枚！そのうち42人の受賞者から総合グランプリを決める展示を開催し、お客さまに投票していただきました。また、園内のインスタ映えスポット紹介や、海獣類のフォトプロップスが使えるセルフブースも大好評でした。

↓NO.1スマスタグラマー決定展！

↓リア獣体験ブース



←飼育員おすすめ！
生きものマニアック
映えMAP



8

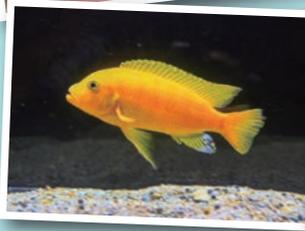
TOPIC

企画展 「違いを発見!! オスとメス見わけてみてん」 を開催

展示期間=3月3日～4月8日

オスとメスで外見に違いがある6種の生きものをペアで展示し、その性差にはそれぞれどのような理由があるのかを解説しました。ゴールデンゼブラシクリッドは、雌雄で体色があまりにも異なるため別種と勘違いされるほどですが、この種の場合、メスは自分の体色と異なるオスを繁殖相手に選ぶ傾向があるため、このような性差が発達したと考えられています。

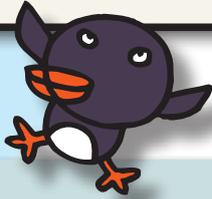
↓実施風景



↑オスとメスで体色が違うゴールデンゼブラシクリッド(左がオス)

スマスイ職員がさまざまな切り口から現場の裏側について紹介します。

すくすく ペンギン成長記 ～第3弾! お手伝い～



背中に幼綿羽が少し残っているひな→

今回は、ペンギン館の飼育の裏側シリーズ第3弾! 題して「お手伝い」です。第2弾では、飼育員は親ペンギンたちに子育てを任せて見守っていましたが、第3弾ではひなのさらなる成長を全力でお手伝い! 一人前、いや一鳥前? のペンギンになるための試練のお話です。



←練習生たち



ペンギンとはいえ、もしかしたら溺れてしまうかもしれません。まずはひなの足が着くくらいの深さの練習用プールに入れて、水に慣らすところから始めます。

1 ふわふわ卒業

ひなの羽は生後2カ月ほどすると、幼綿羽(ふわふわした羽)から成羽(大人と同じ水をはじく羽)に生え替わります。成羽が生えたということは、水に入る準備ができたということで

す。しかし、大人のペンギンたちが泳いでいるプールは、深さが約2mもあります。いきなり大人たちが泳ぐ深いプールに「どうぞ、いってらっしゃーい!」じゃぼん! と放ってしまうと、

2 水泳訓練開始!

初めての水にびっくりして、暴れてすぐにプールから上がってしまうひなもいれば、プールに入れても落ち着き払っているひなもいます。ペンギンも個性がさまざまなのです。練習用プールで泳ぐことを繰り返しているうちに、上手に泳げる



←いざ! 水泳訓練開始!

ようになります。いよいよプールデビュー!! 飼育員もひなと一緒にプールへ向かいます。それぞれのタイミングでプールへダイビング! この時ほとんどのひなが、豪快な腹打ちを披露してくれます。飼育員は万

が一溺れたときに備え、網を持ってプールの脇で見守ります。こうしてペンギンとしての大きな一歩、「泳ぐ」ことを習得するのです。



↑堂々とした泳ぎっぷり

3 いよいよ巣立ち!

野生でひなが海に入るということは、自ら魚を捕り始めるということです。野生と同じように、当園でもプールで泳ぐ練習を始めるのと同時期



餌の魚を待つひなたち→

に飼育員の手から餌を食べる練習を始めます。生まれたばかりのひなは、親が吐き戻した餌を食べて大きくなります。ひなが成長するにつれて、親が吐き戻す餌も少しずつ大き

くなります。自ら餌を食べる練習をする時に親がそばにいと、ひなは親に餌をねだり続けてしまい、親もひなに餌を与えてしまいます。それではいつまでも独り立ちできないため、ここで親子を離します。ついに巣立ちを迎えるのです! そして、ひなにとっての最大の試練、自ら餌を食べる練習が始まります。

↓上手に食べられるようになったね!

4 いただきます!



↑強制給餌の様子

当園のペンギンたちの主食であるアジで練習を始めます。アジには背びれと腹び

れにたくさんの鋭い棘(とげ)があります。初めはできるだけ小さめのアジを用意し、のどに刺さる恐れのあるものは、全て取り除きます。そして、飼育員がひなの嘴(くちばし)を開き、口の中にアジを押し込みます。これを「強制給餌」といいます。初めは何かわからないうちに飲み込みますが、こうした練習を繰り返すうちに、ひなは口に入ってきたものを食べられるものと認識していき、アジを見せると自ら嘴を開くよう



になります。こうしてひなは自ら餌を食べられるようになります。



ペンギンシリーズ第3弾は、「泳ぐ」そして「食べる」というとても大事な練習のお話でした。次号ではついに、ひなたちが大人の仲間入りを果たします! お楽しみに!



ハシナガウバウオ

Diademichthys lineatus

海水魚

千葉県館山湾~鹿児島県までの太平洋沿岸,三宅島,琉球列島,海南島,インド-西太平洋域(ニューカレドニアまで)

全長5cmほどの小型魚で水深3~20mの岩礁域やサンゴ礁域に生息する。主にガンガゼなど棘の長いウニの仲間の周囲で生活し、危険が迫るとその棘の間に隠れて身を守る。当園では、ガンガゼから離れ、吸盤状の腹びれで岩や水槽の壁などに付着していることが多い。食性は肉食で、カイアシ類などの動物プランクトンや小型の甲殻類、宿主であるウニの棘や管足を捕食する。体表から有毒な成分を含む粘液を分泌することができるが、使用目的は明らかにされていない。雌雄によって吻の形が異なり、オスの吻は太短く、メスは細長い。 [水野光大]



ガムシ

Hydrophilus acuminatus

無脊椎

日本全国;朝鮮半島,台湾,中国。

水草が生い茂った湿地帯や休耕地、池沼などさまざまな水域に生息する。普段は植物を中心とした雑食性だが、繁殖期には魚の死肉などを食べる。頭部を水面から出して植物につかまり、触角を使って、呼吸用の空気を頭部と胸部の間から平面状になった腹側に送り込む。腹面には細かな毛が生え、空気をため込むのに役立っている。呼吸は腹部にある気門で行う。後肢の毛がゲンゴロウ類に比べて少ないため、遊泳能力は劣るが、泳ぐよりも、繁茂した水草を足場にして伝って移動することが多い。また、水槽のふたにわずかな隙間があると飛んですぐに脱走するため、当園では「脱走名人」と呼んでいる。 [磯崎祐助]



メキシコサラマンダー

Ambystoma mexicanum

両生類

ソチミルコ湖とその周辺の水路(メキシコ)。

日本では1985年にメディアで取り上げられて一大ブームとなり、その後も多様な改良品種がつけられペット市場に並ぶ状態にあるが、野生では、生息水域の埋め立てや外来種からの被害などにより絶滅の危機にひんしている。本種は一生陸に上がらず、幼生の外形に近いまま成熟する「ネオテニー」という特殊な成長の仕方をする。発達した外鰓で主に鰓呼吸を行うが、肺も備わっており、水面から口を出し直接空気呼吸を行うこともできる。当園の展示水槽内でも、まれに水面まで泳いで空気を吸う行動が見られる。現地の言葉で「水の犬」を意味する「アホロートル」という名称で呼ばれることもある。 [小橋加奈]



チョコレートグラミー

Sphaerichthys osphromenoides

淡水魚

インドネシア,マレー半島。

水中の植物の遺体から抽出されたタンニンで褐色に染まった弱酸性の軟水を好む。多くは止水環境に生息し、ろ過循環のためにやむなく水流を作った水槽での展示では、流れに負けてしまう姿がしばしば見られる。本種を含むグラミーの仲間は、空気中からも直接酸素を取り込めることが知られている。本種は成長しても全長6cm程度の小型種であり、比較的寸詰まりな体形とダークチョコレートのような体色が特徴的である。繁殖はオスが作った泡巣にメスが卵を産み付け、受精卵を口内で保護するといわれているが、保護は雌雄のどちらが行うのか文献によって異なり、はっきりとはわかっていない。 [村西美穂]



テングカワハギ

Oxymonacanthus longirostris

海水魚

小笠原諸島,高知県柏島,愛媛県須ノ川,琉球列島;~インド・西太平洋域。

サンゴ礁にのみ生息するカワハギの仲間。サンゴ(特にミドリイシの仲間)のポリプを偏食し、日中は常に餌を食べている。その食性のため、水族館では長期飼育が難しい。ペアになった雌雄は、常に一緒に行動し仲むつまじいように見えるが、現実とは異なる。オスは複数のメスと繁殖するためにハーレムを築こうとチャンスを狙っている。一方、メスは一緒に縄張りを守るオスが他のメスにうつつと抜かすと、その間餌を食べる効率が落ちてしまうためオスを見張っている。基本的に一夫一妻であるが、雌雄の比率がメスに傾いている海域では、ハーレムを形成している場合が多い。 [加茂耕太郎]





淡路島で保護されたアオウミガメ(2015)



明石市の海岸で孵化したアカウミガメ(2014)



播磨灘で保護されたタイマイ(2017)

大阪湾・播磨灘に来るウミガメたち

研究教育課
石原 孝

開 港150年を迎えた神戸は、古くから海運の要衝として名をはせてきました。その要因の一つとして、神戸の前に広がる大阪湾や播磨灘を含めた瀬戸内海が比較的穏やかで、荒れても船が逃げ込める島陰の多い内海であったことは見逃せません。また、流れ込む河川水に含まれる栄養塩によって育つ大量のプランクトンに支えられる、生きものの豊富な海でもあり、人々もその恩恵にあずかってきました。兵庫県が全国1、2位の生産量を誇るノリの養殖も、波が静かで、河川から栄養塩が供給される大阪湾・播磨灘があつてのことなのです。

この大阪湾・播磨灘では、今回の主役、ウミガメも時折見つかります。ウミガメは暖かい南の海の生きものだ、と思われるかもしれません。確かに熱帯や亜熱帯の海の方が、そして大阪湾・播磨灘のような内海よりも太平洋や東シナ海のような海流の影響を強く受ける外海の方が、ウミガメはたくさん生息しています。それでも実際に、大阪湾・播磨灘にもウミガメはやって来るのです。それでは、いつ頃、どんなウミガメが、何をしにやって来るので

しょうか?その疑問の答えを探るため、大阪湾・播磨灘で2005年1月～2018年3月に、須磨海浜水族園で調べたり一般の方から寄せられたりしたウミガメの情報をまとめました。

まず、ウミガメが発見される状況を大きく「産卵」と「産卵以外」に分けました。「産卵」だけ特別扱いする理由は、産卵するウミガメは100%成体のメスであるためです。さらに言えば、大阪湾・播磨灘ではアカウミガメに限られます。ちなみに、2005年以降では大阪湾・播磨灘で合計16回の産卵が確認されています。一方の「産卵以外」の発見状況では、オスでも幼体でも、またアカウミガメだけでなく、アオウミガメやタイマイなども見つかっています。そのため、「産卵以外」の情報からは、その海域にいるウミガメ全体のことが見えてきます。具体的に「産卵以外」とはどのような状況かといえば、「混獲」や「漂着・漂流」がそれに当たりますが、聞き慣れない言葉かもしれません。簡単に言えば「混獲」とは、漁獲対象ではないウミガメなどの生きものが誤って漁具に掛かってしまうことで、「漂着・漂流」は弱ったり死んだりして、海

岸に流れ着けば「漂着」、海上を漂っていたら「漂流」となります。では、ここからは大阪湾・播磨灘に生息するウミガメについて、「産卵以外」、つまり「混獲」と「漂着・漂流」の情報から分析していきましょう。

「混獲」と「漂着・漂流」による情報は計98頭に上り、中でも2016年には15頭、2013年には14頭が確認されています。このうち発見時に生きていたのは25頭で、残る73頭は死体で見つかりました。全てのウミガメが見つかるわけではないので、大阪湾・播磨灘に来るウミガメの実数や、生き残れる割合がどれくらいなのかはわかりませんが、感覚として大阪湾・播磨灘での生存率はあまり高くないのではないかと感じています。当園では少しでもウミガメの生存率を上げるために、神戸市みなと総局と協力して「瀬戸内海ウミガメレスキュープロジェクト」を実施していますが、このプロジェクトについてはいずれ機会を改めてご紹介したいと思います。



保護されたウミガメは夏場を神戸空港の人工海水池で安全に過ごす

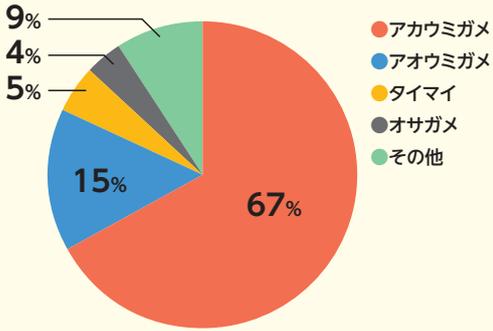


図1 発見されたウミガメの種類と割合

話を戻しましょう。大阪湾・播磨灘にやって来るウミガメについて、前述した98頭を詳しく見てみます。1番多い種類はアカウミガメで65頭でした。2番目に多いのがアオウミガメで15頭、3番目はタイマイで5頭でした(図1)。他にもオサガメ4頭、クロウミガメ1頭、雑種2頭で、種のわからなかったものが6頭いました。北太平洋で見つかるウミガメのうち、今回確認できなかったのはヒメウミガメだけで、ほとんどの種類は大阪湾・播磨灘にも入って来ることがわかります。

次に、大阪湾・播磨灘にウミガメは定住しているのでしょうか?いえ、どうもいる時期といない時期があるようです。発見頭数を月別にまとめると、5月~12月に多く発見され、3月の発見は全くありません(図2)。2月にしてもアカウミガメが1頭だけ、4月も種のわからないウミガメが1頭だけです。2月~4月は大阪湾・播磨灘の水温が最も低くなり、水域によっては10℃を下回ります。ところが同じ時期、太平洋まで出ると、水温は18℃~20℃と随分暖かくなります。これは、大阪湾・播磨灘は太平洋に比べて浅く水量が少ないため、気温の影響を受けて水温が下がりやすいこと、また太平洋岸には赤道付近の暖かい海水を運ぶ黒潮が流れていることが関係しています。その結果、変温動物であるウミガメは、冷たくなりすぎた大阪湾・播磨灘から暖かい太平洋へと出て行ったものと考えられます。

次に、どれくらい育ったウミガメが来ているのでしょうか?成長段階を見てみましょう。ウミガメの大きさは硬い甲羅の長さで表します。甲長を見ると、まだ成体の大きさになっていない個体が多く来ていることがわかります(図3)。つまり、産卵地があるからといって、全ての個体が繁殖のた

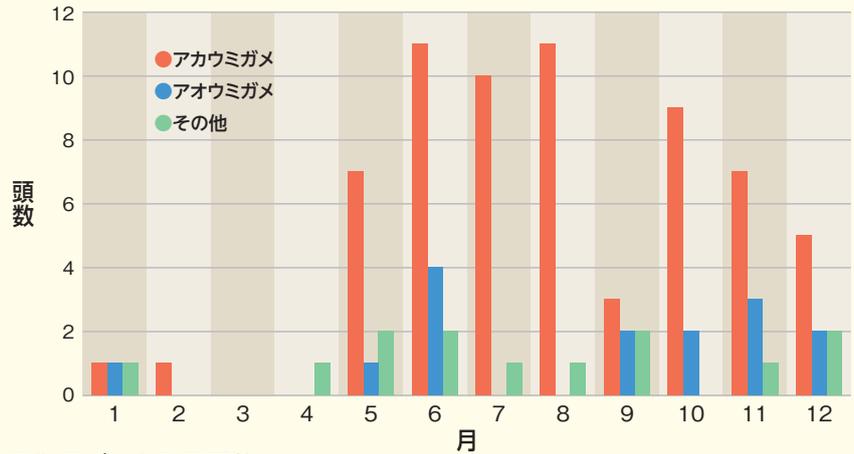


図2 月ごとの発見頭数

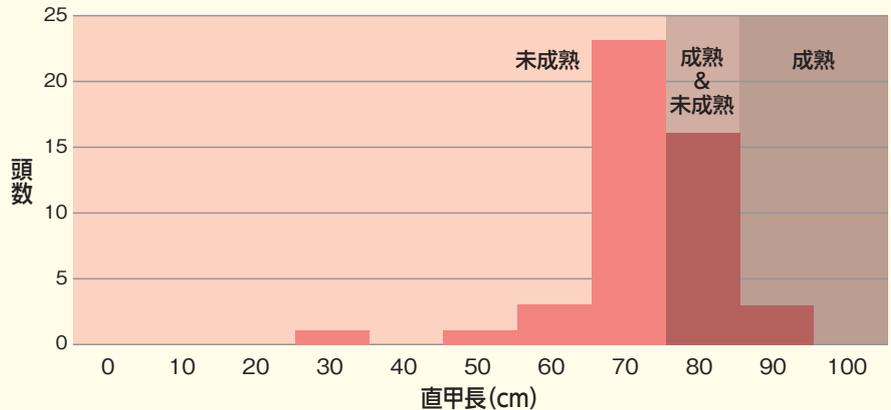


図3 発見されたアカウミガメの甲らの長さ

めに来ているわけではないということです。繁殖の次に考えられるのは餌場としての利用です。そこで、餌は何をどれだけ食べているのか、何頭かのおなかの中を観察しました。大阪湾・播磨灘に一番多いアカウミガメでは、13頭のうち9頭は胃の中には何もなかったりほとんど何も入っておらず、3頭からは多量の魚の骨が、1頭からは多量のヒトデの仲間が見つかりました。アカウ



アカウミガメのおなかから出てきたヒトデ(モミジガイ)の仲間

ミガメの自然界での常食は巻き貝や甲殻類なので、アカウミガメにとっての餌環境は良好であるとはいえないようです。一方で、アオウミガメは調べた4頭全てで胃や腸は主に海藻類で満たされていました。海

藻や海草を常食とするアオウミガメにとって、大阪湾・播磨灘の餌条件は良好なようです。

それでは、アカウミガメは何のために大阪湾・播磨灘にやって来るのでしょうか?その答えは悔しいことにわからないのですが、新しい餌場を求めてやって来る個体が多いのではないかと私は考えています。産卵を目的とするアカウミガメの成体メスは別として、特に若いウミガメはより良い餌場を探して旅を続ける間に、大阪湾・播磨灘に入ってきたのではないかと思うのです。そこで良い場所があればよし、なければ別の所へ移動する、ということなのかもしれません。では、大阪湾・播磨灘は、アオウミガメには良くてもアカウミガメには向かない海域なのでしょうか?そう判断するのは早計です。冒頭で述べたように、本来は生きものの豊かな海域です。今はアカウミガメの餌となる生きものが少なくとも、環境が整い、餌生物が増えればアカウミガメも思うさま食べることができ、もっと多くのウミガメを大阪湾・播磨灘で見ることができるようになるかもしれません。

クジラに会いたい! ～座間味村の魅力に触れた旅～

皆さんは実際にクジラに会ったことがありますか?今回の旅で人生初のザトウクジラに出会った時、その雄大さに私は大変大きな感動を覚えました。この記事を通して、「よし、クジラに会いに行ってみよう!」と思っていただけばうれしいです。

舞台は沖縄県那覇市から西へおよそ40kmの慶良間諸島のうち、多くの島々から成る座間味村。冬になるとザトウクジラが北の海から出産と子育てのためにやって来ます。今回の出張は、当園で開催した「クジラを見ずに何が人生だ!～座間味村から特別展2018・冬～」の実施に向けて、座間味村の魅力を体感し、その経験を展示に生かすために企画されました。その一番の目的はザトウクジラに会うことでした。

フェリーで那覇から座間味に向かう途中、きれいな海と緑の島々が迎えてくれます。座間味島に上陸するとすぐに島独特のゆったりとした時間を感じることができます。島唯一の信号機、車1台分ぎりぎりのメインストリート、道端でくつろぐ猫たち。初めて訪れるのになぜか懐かしい気持ちになり、私はすぐにこの島のとりこになりました。



↑島唯一の信号機



↑座間味村のメインストリート

した。

翌日は好天に恵まれ、朝からホエールウォッチング!ザトウクジラに会わずして帰れない。そんな焦りを抱きながら、祈るような気持ちで海へ向かいます。出港1時間後、船長とガイドさんが



↑見つめる先にクジラが...



↑スパイホップ

クジラを発見!方向を指差し説明してくれますが、私には見えません。じっと目を凝らしていると、遠くで勢よく潮が上がりました。「いた!ザトウクジラだ!」。初めは、いつどこで水面に姿を現すのか、どんな行動をしているのかなど、クジラの動きがわかりません。でも、何回も何回も見ているうちにクジラの行動を想像できるようになり、自分で見つけられた時はとても興奮しました。

今回は取材ということで7時間も船に乗せてもらい、クジラの興味深い行動を多々見ることができました。中でも、水面から顔を出してこちらの様子をうかがう“スパイホップ”、ジャンプするように水面上に飛

び出し、水面に体を打ち付ける豪快な“ブリーチング”は特に印象的でした。あの巨体で飛び出してくるザトウクジラのパワー、クジラの他にも不思議な生きものがごろごろいる海の大きさに圧倒された航海となりました。

今回の出張を通じて、座間味村の村長をはじめ役場の方々、船長やガイドさん、フェリーで出会った座間味村の少年、島の魅力を語ってくれた村民の皆さん、多くの方と出会えました。訪れた人をウエルカム精神で迎えてくれる、温かく居心地の良い島でした。クジラをはじめ、人や生きものなどさまざまな素晴らしい出会いに恵まれた旅となりました。

今までも、これからも、「縁」と「感謝」を大事にして



海獣飼育課
岩崎将人

PROFILE

1979年千葉県生まれ。高校時代、ドルフィントレーナーを目指すことを反対されるが、自分の意志を貫き、先生と両親を説得して専門学校へ。卒業後は和歌山、神戸、広島と勤務地を変えながらトレーナーとしての技術を磨き、自分の追い求めるトレーナーになるため現在も奮闘中。

昨年の4月に当園で働き始めた時、みんなから「おかえり!」という温かい声をたくさん掛けてもらいました。なぜなら、7年前まで当園のイルカチームで働いていたからです。私の水族館人生が変わっているのか、私自身が変わっているのか、それともこれが普通なのでしょう?

初めて当園で働く前は、イルカのふれあい施設や、イルカやクジラの種類の多い施設に勤めていて、20代の頃は四六時中イルカのことを考えて過ごしていました。30歳を目前に、「縁」があって当園のイルカチームに入り、腕を磨くことになったのです。勤め先が変わればやり方も変わります。当然、飼育されているイルカも別の個体なので、何もかもが以前と同じようにはいかず、本当に新しいことに挑戦する日々でした。先輩方に

相談をしながら、イルカの新しい行動を引き出すにはどうすればよいかみんなで話し合ったことを思い出します。夢中で続けていると不思議なもので、また「縁」があって別の水族館へ…。そこで6年間勤めた後、再び「縁」に導かれるように当園に戻ってきたのです。

水族館で勤務して担当する動物種が変わることはあっても、こんなに勤め先が変わることはあまりないように思います。勤め先が変わることで大変なこともたくさんありましたが、マイナスなわけではなく、多くのことを得ることができたのも事実です。異なる水族館で働くことで、それまで自分の周りにはなかったアイデアを得たり、技術を目の当たりにしたりすることができました。また、そこでしか出会えない飼育に人生を懸けた人の考え方や取り組み方に触れ、視野を広く持つことや人とのコミュニケーションの大切さもたくさんの方から学びました。

最近思うことは、「もし同じ所に居続けたら、ここまで成長できていたのだろうか?」ということです。人それぞれ仕事も違えば成長するきっかけも違うと思いますが、私の場合はいろいろな水族館で働くことが、自分を大きく成長させてくれるきっかけだったと思います。「縁」があって勤め先が変わった私の水族館人生は、「普通」でも「変わっている」わけでもありません。誰かと同じ人生でもない、私にしかできない水族館人生を歩んできたと思います。まだまだ続く水族館人生、一緒に働いてきた仲間や関わってきた生きものたち、今までいろいろな「縁」で出会った方々に「感謝」しながら、そしてこれから出会う新しい「縁」を楽しみにしながら、まい進していきたいです。

↓8年前の冬、マミーとの共演



↑2017年須磨ドルフィンコースト



↑この春、マミーの子どもロクマル(右から2番目)との共演



亀崎博士の水族観

当園の学術研究統括である亀崎直樹が、園内のさまざまな水槽や生きものの見方を紹介・提案します。

餌の少ない海での生き方

サング礁の魚が美しいのは、透明度の高い海で熱帯魚は視覚でコミュニケーションを取るためと2017年12月号で説明した。水が透明なのは植物プランクトンが少ないからだ。つまり光合成があまり行われな。光合成が少ないとその生物は少なく、餌も少ない。そんなサング礁の海で、どうして豊かな生物がいるのだろうか? その理由はやはりサングだ。サングはカラフルだ。なぜならサングは体の中に植物プランクトンを宿している。その色がサングを彩る。それがサングの中で光合成を行う。熱帯の強い光とサングからもらう養分でどんどん光合成を行い、自らが増えるとともに、サングにも有機物を与え、サングは伸びる。サングは魚や生物に食べられる。サングをよく見てほしい。表面からヌメヌメした粘液が出ている。この有機物も小魚やエビ、カニなどの重要な餌になる。熱帯の海では動物のサングが光合成をする野菜となって、あの多様な動物たちを養っているのだ。

